慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『日本女子大学学園事典：創立一〇〇年の軌跡』の紹介及び『慶應義塾史事典』と『福沢諭吉事典』の感想
Sub Title	An introduction to the Encyclopedia of Japan Women's University-100 years history of the academy and some observations regarding The Keio Encyclopedia and An Encyclopedia of Yukichi Fukuzawa
Author	秋山, 倶子(Akiyama, Tomoko)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2011
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.28, (2011.) ,p.227- 238
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集2：事典がひらく新たな世界
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20110000-0227

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『日本女子大学学園事典――創立一〇〇年の軌跡』の紹介及び『慶應義塾史事典』と『福沢諭吉事典』の感想

秋山倶子

日本女子大学成瀬記念館に勤務しておりました秋山でございます。

『慶應義塾史事典』と『福沢諭吉事典』の完成おめでとうございます。まず大部で立派なことに圧倒されまして、何と申し上げていいかわからないぐらいの、すごい事典だなと感じております。

1、はじめに

私自身について少し自己紹介させていただきますと、私は日本女子大学の学園の歴史を扱う成瀬記念館というところに、記念館開館の準備段階の一九八三年から以後二〇〇二年三月まで勤めておりました。これから紹介させていただく『日本女子大学事典』は記念館で責任をとりましたのでその編集にも携わりました。この

『事典』の発行は二〇〇一年の末、いまから約一〇年前のことですから忘れていることも多くて、それに加えて個人的には引っ越しなどをしまして資料が出てきません。至らない話になりますことを、お断りしておきたく思います。

最初にこのシンポジウムについては、私の当時の上司であった中嶌邦のところに、西澤先生から連絡がありました。ただ、現場の人の声をという雰囲気だったということに加えて、『日本女子大学学園事典』の紹介と、慶應義塾大学の二つの『事典』の印象を話してほしいという要望でした。それで当時の担当者であった私でもいいかなと思いお話をさせていただくことにいたしました。ですから『事典』に携わった職員の話だと思ってお聞きいただきましたら幸いでございます。

『事典』を一〇冊ほど用意いたしましたので、回覧していただきまして、『日本女子大学学園事典』の雰囲気を知っていただければと思います。

2、『日本女子大学学園事典――創立一〇〇年の軌跡』の紹介

（1） 事典出版のいきさつ

この『事典』の出版のいきさつというのは、「編集後記」のところに書いてございますけれども、日本女子大学創立一〇〇周年の記念出版の中心になるものとしてつくられました。一般に書かれます一〇〇年史ではなくなぜ『事典』になったのかと申しますと、まずは一味違う形で「学園史」を提示できないかと考えたことがあります。学園史の大きな流れというのは年史でわかりますけれども、先ほど少し井上先生が触れられました

ように、一つの教育活動の出発がその後どのように変っていったかは年史ではとらえにくい部分があります。そして関連した人物もかかわった当初のそのときの部分にとどまってしまいがちであるということ。それから、近年「学園史」が教育史の研究対象となって、私どもでも女子教育のパイオニアということで問い合わせが非常に多くなっておりました。『事典』があれば即答が可能である、と思うこともありました。それから、「一〇〇年の歴史」というのは編集担当者だけでは把握しきれない部分がありますから、『事典』の形式によってなるべく多くの方に参加してもらおうということもあります。さらに『事典』というものを編集するに足る内容――歴史がある、女子教育のパイオニアである――が、本学のほうにあるという自負も少なからずあると思っております。

そのほかに成瀬記念館の創設以来の調査・蓄積があり、更にこの当時の館員のメンバー構成が、この『事典』をつくるに堪えるであろうというふうに私個人としては推察ができたこともあります。その状況の中でも特に女子教育を専門とし、そして本学創立者成瀬仁蔵の研究者である中嶌邦名誉教授がおられ、この方を核として『事典』は出来上がるということを予想しておりました。そして、実際に『事典』編集に取りかかりますと、実に多くの方が多方面でバックアップしてくださいました。

なお、『事典』発行を決定する前には、一九九一年七月から一年間、各大学の『一〇〇年史』を検討してまいりました。その結果をふまえ、学園の資料を収集しながら展示をして、『資料集』も発行してきております。以上が出版の背景でございます。

（2）事典の概略

『事典』の概略については、お手元に私が簡単につくりましたメモを見ていただきますとよろしいかと思います。

制作ですが、本学には出版会はございませんので女性関係のものを多く出版しておりますドメス出版にお願いしました。

それから「目次」の巻頭のあいさつが三人になっております。学長の後藤祥子、前学長の宮本美沙子、それから元の学長の青木生子の三名にあいさつをお願いしました。

執筆協力者は二七六名に及ぶのですが、慶應の三〇〇何人かにはとても及びませんけれど、私どもとしては精一杯多方面の方に書いてもらおうという、その現れがここにあることになります。『事項事典』と私たちははじめから呼んでいたのですけども、この事典は事項中心ですが、学園の歴史全般が利用者にわからなくてはいけません。そこではじめに中嶌邦が『日本女子大学の一〇〇年』という通史を短く要点をふまえて書かれました。『学園事典』そのものは項目が八六七、このうち人名が二七九です。そして写真が一九九枚（二枚の図を含む）。付表（文末に掲載）には九つの表が入っております。索引は人名索引と事項索引、編集後記、創立一〇〇年史編纂委員会名簿という、順序で成り立っております。

それと先ほどお話がありましたけれども、この『事典』は日本女子大の学園のホームページから生涯学習センターに入りますと、そこでパソコンで見ることができました（本年三月削除）。生涯学習センターを開設するのも一〇〇周年記念事業の一つでした。ですからそこにも記事や写真を全部渡していくということもありまして、私どもには多岐にわたる業務があったわけです。『事典』の通史の部分というのは英訳をしまして、小

冊子にして配布出来るように、いたしました。

（3）編纂組織

これらの『事典』を編集するために、日本女子大学一〇〇年史編纂委員会が一九九七年に立ち上がり、その下で実務担当者の会が一九九八年のはじめに発足しまして、この代表を中嶌邦が務めました。この会は二〇〇一年一一月まで月一回、三一回の会を持ちました。実際の実務は中嶌邦とこの組織の下におりました成瀬記念館の館員が担当いたしました（百年史編纂事務室）。館員はその当時四名（一名百年史のため増員）と、非常勤の館員三名が加わりました。館員のうち二名は一〇〇周年の展示と、西生田のキャンパス展示も含めまして、日常の開館を担当しておりましたから、これは今振り返ってみますと修羅場のような現場でございました。いわゆる事務局というのがないので、百年史編纂事務室がすべてを行っていました。『慶應義塾史事典』を見ておりましたら事務局がしっかりとあって、組織が本当にしっかりとしておられ、ああ、こういう中で『事典』はできるのだなと、それはそれでたいへん感心いたしました。

（4）進行状況

進行状況ですが、まず編集方針を決め、項目を選定しました。項目は四段階にランクをつけ、文字数を決定して、執筆者依頼文、執筆要項など、全部必要に応じて私ども実務を担った者が考えて、それを上部の会に上げて、了承を得ました。

一九九九年のはじめには、個人名（物故者に限る）分の執筆者も決定して、締切りは二〇〇〇年一月という

ことにしました。その三月にはドメス出版と打ち合わせ。四月には大学の各学科分、附属校園分はそれぞれの部署の方に書いていただくため、学科、附属校園の方たちへの依頼をいたしました。七月に正式に書名は『日本女子大学学園事典―創立一〇〇年の軌跡』と決定いたしました。

二〇〇〇年の二月に原稿は集まってきたものから、中嶌代表と館員の二名で検討を始めました。七月にドメスと入力について相談し、八月には中嶌邦の通史が完成しましたので、その英訳の開始をお願いしました。一〇月にドメスに人名事典の分の原稿を提出して、二〇〇一年一月二四日には人名分の初稿を出稿いたしました。

同時に学内へは進行状況として「日本女子大学学園史ニュース」というのを発行いたしまして、教職員を中心に配布、周知をし、理解を求めてまいりました。それが大体の進行状況でございます。

（5）苦心したことなど

この『事典』をつくるに苦心をしたことなどをというコメントをいただいています。その点を申し上げますと、やはり項目としては教育関係に選定漏れが出てしまったということ。それから、個人名の場合には詳しい履歴がわからずに、取り上げられなかった方もあります。とくに外国からの留学生は故国へ帰って活躍したことだけを漏れ聞くこともありましたが、『事典』の中には載せられませんでした。執筆原稿は書かれた方に原則として戻しておりません。これが慶應義塾の場合と大きな違いでして、数人お戻しした方はあるのですけれども、執筆者に戻さないという方法は統一をとるためには楽だったかもしれません。私どもは第一に時間の制約もありましたし、担当が少人数のこともありましたから、戻すことはできなかったのですけれども、責任はこちら側が全部かぶることになりますから、これはこれで苦しい面もございました。

印刷についてですがちょうどこの頃コンピュータに印刷が変わってくる、それがまだ安定しないような時期だったのです。校正しても文字が動いてしまうのです。ですからつねに初校の意識で校正してきたような、記憶があります。ことに付表の卒業者数ですか、担当者が数字が動いてしまうと嫌だから、自分が原稿をつくるから、それを版下にしてやってほしいというぐらいに、動いてしまうのを警戒しておりました。事典の三六一頁以下の表がその結果です。今まで第一回の卒業生の人数がそれまでの書籍によって一名違ってきています。それをどうやって今回統一しようかということがありました。今回資料をつき合せて決定いたしました。ただ、いちばん困難だったのは何かと言いますと、これは人手不足でした。個人的には校正をもう一人どなたかに任せられたならという気持ちがしておりました。

大体『日本女子大学学園事典』の紹介はこれぐらいにいたしまして、次は、慶應義塾大学と日本女子大学について触れてみたいと思います。

3、慶應義塾大学と日本女子大学

日本女子大学はいろいろな方の援助で成り立った学校です。とくに大隈重信は創立委員長であり「大隈さん」と呼ばせていただくぐらいに、卒業写真には必ず真ん前にドンと杖はちょっと横に向いて写っておられます。その大隈さんが慶應義塾大学の福沢先生と親しくあられたというのを、私は『福沢諭吉事典』を見て知りました。そうしますと大隈さんは福沢先生に日本女子大学のことを話されているに違いないと考えました。日本女子大学の創立についての資料としては「創立事務所日誌」というのが全四冊残っております。「日本女子大学

史資料集」の発行にあたって先ず翻刻しておりましたから、その人名索引をあたってみました。

明治三十一年五月十日に、「成瀬君大隈伯ヲ訪問セシ時ニ福沢諭吉氏へ紹介スベケレバ訪問シテ加盟セシメヨト云ハレタリ」という記事が出てきました。明治三十一年六月五日には、「福沢翁へ草案ノ如キ手束を送ル、大隈伯の名ヲ以テ」というのがあります。その次、明治三十一年六月六日に、「成瀬氏福沢氏ヲ三田ニ訪フテ面談ス」というのもあります。それから福沢先生は病気をされると思うのです。そのあとが少し間が空きまして、明治三十二年十月二十三日に成瀬仁蔵と戸川安宅が訪問しますけれど、差し支えで会えなかった。三十三年三月六日に、「福沢諭吉氏面談」と書いてあります。三十三年三月三十一日にも面談しております。これらの面談の内容はかかれておりません。五月の十一日は不在で、そのあとが「お見舞」ということが書いてあって、そこで記述が終わっています。明治三四年二月三日に亡くなられましたから、関係はここで終わってしまうのですけれども、もしご存命だったらさらなる接点が出来たのではないかなというのが私の印象でございます。

成瀬仁蔵は著書『女子教育』（明治二九年刊）という本を人を訪問するときに持って訪ねていかれたといわれております。たぶん福沢先生にもこの本を持って出かけられたのではないかというのは、これは私の推測でございます。福沢先生の女性観に何らかの影響があったのかもしれません。

次に、日本女子大と関連のある人名を、この『義塾史事典』と『福沢事典』で、私が名前を覚えている方だけですけれども見てみました。鎌田栄吉先生、この方は成瀬と臨時教育会議で一緒に活動しています。あと、慶應義塾と縁の深い森村市左衛門は日本女子大学校に多額の寄付をくださり、当時の教育学部と豊明小学校が出来上がったそのもとになっていらっしゃる方です。それで日本女子大学の附属小学校はいまでも豊明小学校という名前がついておりますけど、これは豊明会を由来したものでございます。ご子息の開作氏も理事・評議

員として協力していただいておりました。それから、大森憲太先生は慶應義塾大学医学部の教授で、同学部食養研究所の最初の主任（所長）であられました。日本女子大学校で大森先生に家政学部で栄養方面を教わっている学生がおり、卒業生をその食養研究所で育ててくださいました。その中には本学の第八代学長になりました道喜美代もおります。何人もの方が食養研究所の栄養部門で働いておりました。

実は私は家政学部出身で、私が卒業した頃はまだ食養研究所がございました。で、栄養士免許を取得するには実習が必要で、食養研究所で病院給食の実習をしたことを思い出しました。

それから、両校に関係の深い渋澤栄一も載っております。茅野蕭々は夫人が卒業生ですから当然なのですが、国文学部で教えておられました。高橋誠一郎は理事や評議員もして、戦後も教員であられました。西脇順三郎も日本女子大で長く教えておられました。ざっと見ただけでこのように大変な方々がおられましたので、ほかにもずいぶんつながりはあるのではないか、と感じております。

4、『義塾史事典』と『福沢事典』の感想

この二冊の本は本当に重厚で、義塾の皆様の力を結集した結果であるということが、もう手に取っただけでわかる『事典』です。ですから私どもの『学園事典』と比較しようとか、そういうことはまったくないのですけれども、学校の規模も違いますし、規模といえば卒業生数がこの『事典』のできた時点で、慶應義塾は新制の卒業生数が三〇万三千人（含通信教育課程）弱です。日本女子大はその時代に合わせますと、新制の卒業生数は六万六千人（含通信教育課程）強です。慶應義塾の女子学生の卒業生は何人かといいますと、その時点で

たしか五万九千人弱であったように思うのです。かなりの、五分の一ぐらいが女性を占めているという、その事実に私も驚いているのですけれども。それにしては、ちょっと言わせていただきますと、女性の記述が少ないかなと、思いました（笑）。女子教育とか女子教員とか女子学生というふうに触れてはあるのですけれども、これだけの卒業生が出ているということは、どういう人が輩出されているのかな、どういうところに特徴があるのかなとか、知りたくなってまいります。

それから、『福沢事典』を拝見しまして、日本女子大でも『成瀬仁蔵事典』ができれば、と思いました。ただ、中嶌邦がコメントしてきたのですけれども、日本女子大ではまだ基礎的な観点から始めなければならないのが現状でむずかしいということなんですが。この二つがセットになって学園像がわかるのではないかと思うのです。私自身項目を選んでいて、成瀬の個人のことなので学園項目には入れないというものが当然出てきてしまうのです。そうするとこの『学園事典』だけでは成瀬仁蔵のことは足りないというのが現状で、ほかのものを見なくてはいけないのではないかということが言えるように思うのです。そのへんは非常に残念で、『福沢事典』の出版の快挙というのを、本当に素晴らしいなと思いました。

それから、あとアトランダムになりますけれども、『義塾史事典』のほうに学生の項目がずいぶん入っていたと思うのです。学生の社会史としてこういうのは貴重ですし、第二次世界大戦のことなど、私など女子学生側からしか印象になかったのですが、多くの方が亡くなられているというのが、その事実として非常にはっきり出ていて、こういう記述は大切だと思いました。

もう一つ女子学生について言えば、戦後日本女子大学など女子の学校は、すぐに大学院を立ち上げることはできませんでした。ですからもっと学びたい人は慶應義塾や、早稲田や、東大に行っているわけです。慶應義

塾の大学院や大学に入り直した方もずいぶんおられると思います。このような事実が反映されるといいのかなというふうに、女性のことについては思いました。

あと、学部の学科の変遷が私にはすぐにはわかりにくくて、一覧表があればありがたいと思っております。

大体時間がきましたのでこのへんで失礼いたしますけれども、最後にこの二つの『事典』が『資料集』の別巻になるということですから、二〇年かけてつくられるという『資料集』の企画に圧倒されると同時に、やはり素晴らしい日本を代表する学校であるということをしみじみと感じております。

これで私の話は、終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

付表目次

付表 1　日本女子大学 学部・附属校園系統図／大学院系統図 ……345
付表 2　日本女子大学校発起人・賛助員名簿(復刻) ……347
付表 3　評議員・役員（理事・監事）一覧 ……349
付表 4　(1)　日本女子大学校創立期教職員一覧 ……357
　　(2)　附属高等女学校創立期教職員一覧 ……358
付表 5　名誉教授・名誉主事一覧 ……359
付表 6　本学園卒業・修了・卒園者数一覧（創立期～2001年）……360
　　(1)　日本女子大学校卒業者数一覧 1904(明37)年～1941(昭16)年 3 月 ……361
　　(2)　旧制日本女子大学校・新制日本女子大学 卒業者数一覧 1941(昭16)年 3 月～1952(昭27)年 ……364
　　(3)　新制日本女子大学卒業者数一覧 1951(昭26)年～2001(平13)年 ……366
　　(4)　日本女子大学大学院修了者数一覧 1963(昭38)年～2001(平13)年 ……373
　　(5)　附属校園卒業(卒園)者数一覧 1902(明35)年～1947(昭22)年 ……378
　　(6)　附属校園卒業(卒園)者数一覧 1948(昭23)年～2001(平13)年 ……380
付表 7　校歌・学生歌（大学・高等学校・中学校・豊明小学校）……382
付表 8　日本女子大学 略年表 ……386
付表 9　学内地図 ……388